



Data

監督・脚本：中島貞夫

出演：高良健吾／多部未華子／木村了／三島ゆり子／栗塚旭／山本千尋／永瀬正敏／寺島進

👁️👁️ みどころ

昭和の時代にはチャンバラ映画がよく似合ったが、平成の30年間が終わり、令和に入る時代状況下では、チャンバラは絶滅危惧種？いやいや、84歳の中島貞夫監督の手にかかれば！？

時代は幕末。舞台は京都。主人公は長州藩の浪人。そうすれば、尊皇攘夷を巡るチャンバラ劇の定番だが、それにしてはタイトルが・・・？そう、本作の主人公は、剣の腕は立つが、ノンポリ、無党派で酒浸りの出来損ないなのだ。

そんな本作では、ラスト30分間の走っては斬り、斬っては走るチャンバラの醍醐味をしっかりと楽しみたい。しかして、多十郎の“殉愛”の行方は・・・？



■□■ 84歳の中島貞夫がこの時代にチャンバラ映画に挑戦！ ■□■

84歳の中島貞夫監督が、平成から令和に向かうこの時代に、チャンバラ映画への愛を込めた本作を発表！時代は幕末。舞台は尊皇攘夷か開国かを巡る対立が激化する京都。主人公は長州藩脱藩浪人、清川多十郎というから、日本では1つの典型的なチャンバラものだ。同世代の山田洋次監督は、『男はつらいよ』シリーズが終わった後も、『たそがれ清兵衛』(02年)、『シネマ2』68頁)、『隠し剣 鬼の爪』(04年)、『シネマ6』188頁)、『武士の一分』(06年)、『シネマ14』318頁)の時代劇に挑戦したり、吉永小百合と組んだ『母べえ』(07年)、『シネマ18』236頁)、『おとうと』(09年)、『シネマ24』105頁)、『母と暮せば』(15年)、『シネマ37』195頁)を発表したり、更に近時は『家族はつらいよ』をシリーズ化している(『シネマ37』131頁、『シネマ40』未掲載、『シネマ42』未掲載)から、その創作エネルギーはすごい。

それに比べると、中島監督は『木枯らし紋次郎』(72年)や『新・極道の妻たち』(91年)等でよく知られているが、もはや過去の人・・・?いやいや、「ちゃんばらが消えようとしているんですよ。それを何とかしたい」と熱く語る彼の創作エネルギーもすごいものだ。また、朝日新聞でも大きく取り上げられた本作で、中島監督は「殺陣の数だけドラマがある。そのドラマを見てほしい」「ちゃんばら本来の魅力を伝えたい」と語っている。

新聞紙評でも好意的なものが多いが、キネマ旬報4月下旬号の「REVIEW 日本映画&外国映画」では、3人の評論家のうち、2人が星5つをつけて絶賛している。しかし、私が行った映画館では観客は10名足らずだから寂しいけれどもこれが現状だ。やっぱり、チャンバラ映画は今や絶滅危惧種・・・?小学生時代に私が両親に連れられて観たチャンバラ映画は、中村錦之助、東千代之介、片岡千恵蔵等が主役を張ったものが多かったが、私はその時からチャンバラものは大好きだった。さあ、平成のラストに見る本格的なチャンバラものの出来は?

■□■高良健吾はチャンバラ映画に似合うの?■□■

若松孝二監督が中上健次文学に挑戦した『千年の愉楽』(11年)では、「高貴で穢れた血」を持つ「被差別部落」の男ながら、美しき「中本の男」の代表として、高良健吾が起用された(『シネマ30』153頁)。彼は、同じく中上健次文学を原作とした廣木隆一監督の『軽蔑』(11年)でもカッコいい男の美学を振りまく主人公を演じていた(『シネマ27』170頁)が、その男ぶりは相当なもの。

もっとも、2015年のNHK大河ドラマ『花燃ゆ』での高杉晋作役は私にちょっと違和感があったから、今風のハンサム男にチャンバラ映画は似合うの?そう思っていたが、さすが一流の俳優。冒頭からの浪人姿もピッタリだ。

■□■テーマは尊皇攘夷?薩長同盟?いやいや・・・■□■

2019年4月は前半と後半の統一地方選挙が決定しているうえ、大阪では4月7日に府知事、市長、府議会、市議会の4つの選挙が実施された。「亥の年」の2019年は、春に統一地方選、夏に参院選と選挙が重なる、12年に1度の「選挙イヤー」だ。しかし、地方選投票率は30%台に低迷しているうえ、地方議員のなり手不足のため、30数%が無投票になっているから、いよいよ日本の民主主義は危機だ。その上、投票日直前の予想では、新聞各紙のほとんどが、「約3割を占める無党派層の動きによって結果が左右される」と書いている。私たち団塊世代が体験した学生運動の時代では、無党派層(学生)は“ノンポリ学生”と呼ばれ、一種の軽蔑感を持たれていた。しかし、今や大学内で政治を熱く語るヤツなどどこにもおらず、ほとんどがノンポリ学生になっている。しかして、長州から脱藩して、今、京都の貧乏長屋に住みながら、小料理屋「満つや」の用心棒をしている清川多一郎の政治的立場は?

本作冒頭、桂小五郎（永瀬正敏）を中心に、ある場所で謀議をしていた勤皇の志士たちに対して新撰組が襲撃をかけるシークエンスが登場する。仲間たちの犠牲の下に桂は脱出できたが、今後の活動のためには、桂の警護ができる腕の立つ脱藩浪人が不可欠。そう考えた一人の先輩浪士（栗塚旭）は、最近ずっと酒浸り状態になっている多十郎の下を訪れ、丁寧に頭を下げながら、そのお願いをすることに。この姿を見ていると、長州にいた頃の多十郎の剣の腕前は相当なものらしい。ところが、多十郎は天下国家のことには全く興味がなく、脱藩したのも国もとて両親が抱えた借金から逃れるためだったとシャーシャーと述べるから、アレレ。しかも、「もし協力すれば、いくらカネを出す？」ときたから、さらにアレレ。この男、そこまで腐りきっているの・・・？

■□■なぜこんな男がモテるの？2人の“純愛”は？■□■

本作で、小料理屋の女将おとよ役を演じたのは、多部未華子。樹木希林の遺作となった『日々是好日』（18年）では、主役を黒木華に奪われ、多部未華子はサブ的な役に回されていたが、華やかさや美人度においては黒木華より多部未華子の方が上。私はそう思っている。

おとよも、その母親も共に男では大失敗をしかけているそうだが、酒浸りでロクな仕事もしていない、ろくでなしの浪人に対して、おとよが好意的だから、アレレ・・・。店でわがまま放題の飲み方をしていた町方役人たちに多十郎が鉄槌を下したのは痛快だが、その後、おとよがしっかり多十郎の背中にすがりついている姿を客たちが目撃してしまうと・・・。母親から「あんな男は絶対ダメだよ」と言われると、「誰があんな男と・・・」と反論していたものの、その後も、要所要所(?)を見ていると、おとよが多十郎に惚れていることは明らかだ。しかし、なぜこんな働き者の美人女将が、多十郎のようなダメ男に惚れるの？やっぱり男は見た目？見た目さえよければ、生活力はゼロでもいいの？

私の中学時代の日活は、吉永小百合、浜田光夫の「純愛路線」がドル箱だったから、2人の“純愛”ドラマをよく見たが、今ドキの東映のチャンバラ映画でここまでの純愛ドラマが展開されるのは少し意外。もっとも、この純愛ドラマは専らおとよからのアプローチだけで、多十郎は一貫して拒否。俺のような男になぜ？放つといってくれ！の繰り返しだから、どうしようもない。一度だけ「やっぱり・・・」という展開も予想されたが、それも一瞬だけで、多十郎が正気(?)に戻ると・・・？

さあ、この2人の“純愛”いや“殉愛”は、これからどう発展していくの・・・？

■□■徹底して主体性ゼロ。なるほど、これが今風の若者！■□■

本作で、京都に潜入している薩摩、長州の不穏な浪人たちを取り締まっているのは、新撰組に対抗するべく新たに組織された京都見廻組。両組織が競って、薩摩、長州の不穏な浪人たちを取り締まっていくのだから、日々その包囲網が狭まってくるのは当然。そのた

め、多十郎の要求通り、大枚を渡して多十郎との密会を希望していた先輩浪士も見廻組の手に落ちてしまったから、多十郎の気持ちは如何に・・・？

また、長州に残っていた腹違いの弟の清川数馬（木村了）が「日本の姿を自分の目で見たい」とわかったようなことを言いながら、多十郎の長屋を訪れてきたから、多十郎はどうするの？そんな中、見廻組の手入れが多十郎の長屋にまで入ってきたから、さあ大変だ。多十郎が数名を切り捨てて、何とか襲撃を撃退したものの、多十郎より数段剣の腕前が劣る数馬は目を斬られたため失明を避けられないらしい。コトここに至ってやっと多十郎は降りかかってくる火の粉を払うために剣を抜いたわけだが、それは裏返して言えば、徹底して主体性ゼロということだ。なるほど、これが今風の若者。

他方、腕利きの襲撃隊が多十郎に斬られたことを聞いた見廻組の隊長、溝口蔵人（寺島進）はビックリだが、逆にそれによって、多十郎を何としても捕縛しなければという意欲に火がついたらしい。とりわけ、それは新撰組より先にやらなければ・・・。そう考えた溝口は、見廻組と町方役人の全力を挙げて、多十郎の捕縛に向かうことに・・・。

■□■多十郎はいかなる方針を？おとよの決断は？■□■

私は、多額の小判を準備してもらった段階で、多十郎は心を入れ替えて桂の護衛に協力するものと思っていたが、多十郎はその金をすべて一晩の飲み代に使ってしまったから、アレレ。更に、それを斡旋した浪士が見廻組に殺されたと聞いても、その仇を討とうとしなかったから、アレレ。やっぱりこの男は天下国家を論ずる気は毛頭なく、ホンモノの無党派層？そう思わざるを得ない。また、そんな多十郎の下に、大した実力もないくせに天下国家を論じるのが大好きな数馬がやってきたのはハッキリ言って迷惑だったが、その数馬が目を切られ、このままでは見回り組に捕縛されるのは間違いなし。さあ、コトここに至って、多十郎はどんな方針を立てるの？

それに注目していると、そんな事態の中で、多十郎はそれまで袖にしていたおとよに対して、何と「数馬を連れて逃げてくれ」「お前しか頼める女はいない」と申し出たからビックリ。もちろん、その援護のために、多十郎は反対方向に血路を開いて追手を引きつけるとのことだが、果たしてそんな作戦がうまくいくの？また、今ドキの無党派層の女なら誰でも「今更そんなことを頼まれても、私はイヤよ」と言うはずだが、さて、おとよは・・・？

■□■これぞチャンバラ！その醍醐味をタップリと！■□■

市川雷蔵の『眠狂四郎シリーズ』は静の剣だが、『宮本武蔵』全5部作の第4作『宮本武蔵一乗寺の決斗』（64年）では、中村錦之助演じる宮本武蔵が、何十人もの吉岡道場の門弟たちを、走っては斬り、斬っては走るチャンバラがお見事だった。近時は、『どら平太』（00年）の中で役所広司演じるどら平太が見事な集団殺陣を見せていた。これらの殺陣では「斬られ役」が重要だが、今では斬られ役を演じる役者が減ってきているため、中島監

督はエキストラ約20人を3週間かけて養成したそうだ。

多十郎を追う捕物方と多十郎とのチャンバラ（立ち回り）の舞台は、①京都特有の街中の路地から、②お寺の境内へ移り、更に③竹林へと移っていくから、本作の殺陣のあり方も三通りに変化していく。街中を走って逃げている間はまだ余裕のあった多十郎が、最後に竹林の場に逃げ込んだのは正解だが、さすがに刀傷をたくさん受けていたから、今や息も絶え絶え状態になっていたのは仕方ない。このままでは、前後左右から刀や槍で串刺しにされるのは必至。そう思っていると、本作はそこで、浅間山荘事件のような(?)ちょっとした挿話を用意しているので、それにも注目！そして、最後はその場に直接乗り出してきた見廻組隊長との2人での決戦になるが、さあその勝敗は？

他方、このような多十郎の立ち回りの反対方向におとよは失明した数馬を連れて逃走していたが、その顛末は？そして、何よりも「多十郎殉愛記」と題された2人の“殉愛”の行方は・・・？93分の本作のラスト30分は、「多十郎 殉愛」というタイトル通りの展開になっていくので、それに注目！

2019（平成31）年4月23日記